Online edition:ISSN2187－7246　　Print edition:ISSN2187－7238

日本経済大学

大学院紀要

創刊号

論　文

わが国における医薬経済学の現状と展望に関する考察……赤瀬朋秀、岡本敬久、濃沼政美（１）
組織と個人の成長を促進するための人事評価を通したパフォーマンス・マネジメント…古川久敬（17）
オープンイノベーションのタイミングに関する一考察
―普及学を用いた携帯インターネットの事例研究―……石松宏和（37）
経営安全性分析の理論に基づく事例研究……石内孔治（51）
人口ボーナス再論―demography より human capital― ……叶　芳和（71）
多国籍企業における資源蓄積のジレンマ……中川　充（81）
高層集合化する住居のリスクマネジメント……仲間妙子（97）
得意技・人格特性と創造性テスト結果の関係……櫻井敬三（111）
国立病院の労働分配率と収益性に関する分析……関口　潔（127）
コンペティティブインテリジェンスの戦略的活用の論拠……菅澤喜男（139）
スマートインフラにおける新しいビジネスモデルの研究……鈴木　浩・城村麻理子（161）
製造業におけるグローバル戦略に関する考察
―タイヤ製造企業の対外直接投資と国際的な提携戦略について―……丑山幸夫（177）
留学生教育施設の競争戦略に関する考察……八杉　哲（197）
ベンチャービジネスの経営戦略に関する研究
―試薬ベンチャーはこの不況下でなぜ活況か？―……天野雅貴（205）
ミャンマーの観光産業の現状と発展可能性……ミヤッカラヤ（215）
中小企業組合のＩＴ化に関する研究……相馬一天（235）
金融分野における消費者保護に関する一考察
―英日中の金融 ADR 制度上の紛争解決機関の比較を中心に― ……金　婧（255）

2013（平成25）年３月

日本経済大学大学院

日本経済大学大学院紀要　2013年，Vol.1，No.1，pp.111−125

得意技・人格特性と創造性テスト結果の関係

櫻井敬三

要旨

本論文は言語創造性テスト結果から創造力の高い順に３グループ（ベスト，ミドル，ワースト）に分け，そのグループ別に得意技，人格特性，生活習慣がどのように関係しているかを分析した。その結果，ベストグループ（流暢性，柔軟性，独創性がすべて平均値以上）は想像力が高く，図工（絵画・彫刻など）が得意なことがわかった。またベストグループには学力が優秀な者のほとんどが入っていた。さらにベストグループとミドルグループ（流暢性，柔軟性，独創性のいずれか平均値以上）は人格特性として内向性が高い（集中力があるが人見知りをするなど）ことがわかった。なお生活習慣についてのグループ別差異は認められなかった。

Ⅰ　はじめに

日本においては20年余に渡り経済の停滞が進行し，約四半世紀前より新たな価値創造が叫ばれいろいろな取り組みがなされてきた。しかし新たな付加価値を生み出す技術・製品の誕生は皆無ではないが，他の先進諸国とは異なり国の成長を促す原動力とは成り得なかった。その根源的理由の１つが価値創造活動の進め方に問題があったのではないか。企業はむろん，大学や官公庁の研究機関等での取組方法の問題である。具体的にはビジネスモデルに代表される技術経営戦略論が前面に出たことにより，本来じっくりやるべき研究開発前の企画段階のコンセプト形成やそのコンセプトを実現するためのキーテクノロジー醸成が十分なされなかったことが考えられる。また，その過程で重要なことは着想を生み出すためには個人の創造性発揮と個人を支援する創造性発揮環境の整備が必要であるがその活動への取り組み姿勢が十分に認識されていなかったものと思われる。

そこで本研究では創造性を発揮する個人に焦点を当て，どのような人物が付加価値を生み出す創造性活動に関わることが良いのかを一度再チェックする必要があると考えた。創造性活動には創造的能力（創造力）と創造的人格の２側面がある（高橋誠［１］(2002)）。前者の創造的能力とは個人が想像力，アイデア，直観などを含む創造的思考を持ち合わせているかを評価することである。具体的にはギルフォードらが志向した創造性の評価能力を把握することである。後者の創造的人格とは結論的には創造を実現できる実行力を持っ

論文審査受付日：平成25年１月21日　　論文掲載決定日：平成25年２月28日

ている人を指している。すなわち，その人が持つ性格や創造する時の態度が重要である。以下，創造的能力と創造的人格との関係性を比較検討することで，新たな創造性活動を展開する上での留意点を確認したい。

Ⅱ　先行研究と研究の枠組み

1　創造性評価値に関する先行研究

創造的能力を把握する方法は創造性テストが1950年代から開発され利用されてきた。テストには言語系（用途，原因推定，標題付けなど）と非言語系（四点描画，図案発見，想像力など）があり，思考の速さ，広さ，独自さ，深さなどが評価基準となっている。そして，創造性テストの創造性評価因子（値）の分析研究は，ギルフォード［２］(1959)が50種類を超える多面的な創造性テストを軍人に実施し，テスト得点間の相関分析から創造性評価因子を抽出しその結果６つの因子「問題を受け止める能力（問題への敏感さ)」,「思考の円滑さ（流暢性)」,「独創性」,「思考の柔軟さ（柔軟性)」,「完成へ工夫する能力（綿密性)」,「再構成する能力（再定義力)」が明らかになったと述べている[1]。時期を同じくして，バークハート［４］(1958))は,「問題に対する感受性」,「円滑さ」,「柔軟さ」,「独自性」,「再構成する能力」,「抽象力」,「まとめ」「直感」の８因子を抽出している[2]。その後シャペロ［５］(1985)は「流暢性」,「独創性」,「柔軟性」,「あいまいさに対する寛容性（問題への感度)」,「遊び心」,「高い IQ」の６因子を抽出している。これらに共通する因子は「問題への敏感さ」,「流暢性」,「柔軟性」,「独創性」の４因子である。その他の不一致因子は，創造性を行う個別テスト内容による相違やそもそもの研究仮説の立て方の違いから来るものと想定される。なおシャペロ［５］(1985)の「高い IQ」因子に関しては，ギルフォードは，否定的見解を示している。恩田［６］(1969)は，小中学生を対象とした知能テストと学科テスト（国語・算数・社会・理科）と創造性テストとの相関分析からいずれも相関性は認められるものの，創造性テストと知能テストは最も相関性が低く，従来の知能テストでは測定できない側面を創造性テストがカバーしているものとしている[3]。したがって，ギルフォードと同様の見解を示している。

本研究ではギルフォードおよび他の研究者（バークハート，シャペロ）の共通因子である「流暢性」,「柔軟性」,「独創性」と実社会の評価で重要な具現化力であるギルフォードの「綿密性」(以下「具現化力」と称す。）の４項目を測定する[4]。

1　亀山貞登［３］(1962）によるとギルフォードの分析過程では、さらに「分析力」、「総合力」、「透徹力」を因子として上げていたが、上記文献では含まれていない。
2　本内容は文献が古く見つけることができなかったために亀山貞登［３］(1962）を参照した。
3　ただし創造性評価因子の内「柔軟性」は知能的因子（論理的学習能力）と比較的高い相関が認められ、「柔軟性」が論理的学習能力に関連性がある因子としている。
4　ギルフォードの知能構造モデルを基にした創造性評価法は古典的方法ではあるが、素早く個人別の評価値が求められる方法として有益と考える。多重知能論、創造性構成要素論に基づくモデルでは今だ、評価法が確立されていない。

2　創造的人格に関する先行研究

高橋［１］(2002）の「創造的人格に関する先行研究」記述内容を整理すると表１になる。被験者や研究の枠組みの相違から表１に示す創造的人物が持っている創造的人格にはばらつきがある。

表１　創造的人物が持っている創造的人格

研究者氏名	創造（独創）的人物の創造的人格	被験者
1.バロン	複雑な非対称な絵を好む	大学生
2.アッシュ	独自判断,分裂質傾向,不安傾向,知能,ユーモア,関心の広さ	不明
3.バロン	知的,想像力豊か,支配的,統率力	軍将校
4.バロン	独創性高・知能低い場合感情的,支配的,気短,進取,率直,皮肉,暗示されやすい	軍将校
5.ポーランド	独立的,知的,表現的,非社交的,独自的,未来の達成に憧れ	高校生
6.テイラー	自主的,自己満足,独立的判断,非合理的ものに心開く,安定的,支配的,自己主張,複雑,自己受容,機知に富む,冒険的,急進的,自己統制的,情緒感受性鋭い,内向的勇気がある	不明
7.ゴロビン	落ち着きがない,風変わりな,わんぱく知的拘束に抑制されない	科学者
8.キャッテル	分裂気質,知能,支配性,退潮性,急進性,自己充実性	科学者
9.高橋・野村	肯定項目：機敏,機知,社交的,陽気,融通がきく 否定項目：気が弱い,気持ちが狭い,自己防衛的,常に気がはる,頼りにならない	大学生
10.中西	活動的,協調的,外交的	高校生
11.田中	自律的意志的行動力（エネルギッシュでタフ）攻撃的,持続性,野心的,意志的,支配的,実行力,自己主張,顕示欲,自律的	研究者
12.河野	自主的に思考,判断し,自発性,健康で,目標に向かって努力,感受性大,自己主張	小中学校教師
13.トーランス	勇気,好奇心,自力判断,没頭,直観的,持続的,独断的,断定的認めず,危険を帰り見ず,権威者意見入れず	学者
14.滝沢	自分を生かそう,環境への積極的働きかけ,対象や問題へのかかわり方の深さ	中学生

（出典：高橋[1]pp.39–45を基に筆者が作成）

そこで表１に記載された人格を，親和図法を適用しグルーピングした。その結果は下記７グループである。各冒頭記載ワードはグループごとのキーワードである。なお言語の後の括弧内数字は出現頻度を示す。したがって記載ない言語は１つしかない場合を示す。

記憶力：知能（２），知的（２），機知に富む（学力記載内容に同じ）
想像力：独自判断，想像力豊か，独立的（２），独自的
得意技：表現的，情緒感受性鋭い，活動的，実行力，自己主張（３），感受性大，自己充実性，冒険的，健康的，目標に向かって努力
学　力：知能（２），知的（２），機知に富む
人　格：分裂質傾向（２），支配的（５），感情的，暗示されやすい，非社交的，自己満

足，内向的，社交的，自己防衛的，外向的，顕示欲，自律性，自主的思考（２），不安傾向，自己受容，急進的（２），自律的行動力，攻撃的，野心的，意志的，直観的，独断的，統率力（２），

生活習慣：安定的，環境への積極的働きかけ，対称や問題への関わり方の深さ

性　格：ユーモア，関心の広さ，短気，率直，皮肉，将来の達成に憧れ，落ち着かない，非合理的ものに心を開く，風変わりな，わんぱく，知的拘束に抑制されない，機敏，陽気，融通，持続性，自発性，勇気，好奇心，自力判断，没頭，断定的認めず，危険を顧みない，権威者意見入れず，自分を生かそう，複雑

グルーピングに当たっては，記憶力（インプット）と学力（アウトプット）は一緒のグループと考え，得意技は音楽・体育・図工といった活動をイメージした上での実施時の行動を起こす動機を選んだ。また人格と性格の差異は言葉の概念が大きいものは前者に入れ，言葉の概念が具体的で行動に近いものは後者に入れた。

上記の分析結果から本論文では創造的人物が持っている創造的人格として，記憶力，想像力，得意技，学力，人格（含む性格），生活環境の６グループに分け創造的人物について分析することとする。

３　人格（含む性格）に関する先行研究

性格診断の方法として類型型と特性型に分類できる。前者はクレッチマーの体格と気質（性格）との関連性分析が有名である（クレッチマー［７］(1985)）が今日では的確な性格診断とはされていない。後者の特性型はフロイト，ユング，ギルフォードなどあるが，中でもフロイトの弟子であったユングの人の心的エネルギーが外界に向くか，内面に向くかの区分けによる性格診断は論理形成が明確でありわかりやすく，その後の心理学者がその診断法を進化され，分析結果もわかりやすいことから性格診断として今日までよく使用されてきた。ユングは外界（他人・事物・出来事など）に向かう人を外向性の人，内界（こころの世界）に向かう人を内向性の人に分け，前者は行動力がありじっくり考えることが苦手，後者は集中力があるが人見知りをするなどを体系化し性格タイプを分類した（関ら［８］(1997)）。

４　研究の枠組み

創造的能力は発想テスト（高橋誠［10］(1998)）と連想テスト（櫻井敬三［11］(2006)）を実施し，流暢性，柔軟性，独創性，具現化力の４項目の評価値の平均点を算出し，そのすべての項目が平均以上のグループを創造的能力が高いグループ（ベスト）とし，すべての項目が平均以下のグループを創造的能力が低いグループ（ワースト）とする。なお１つでも平均値より高い場合には能力が高いグループと能力が低いグループとは別に能力が中

間グループ（ミドル）として区別する。創造的人格は1.思考（記憶力，想像力),2得意技（スポーツ，音楽，図工),3.学力（GPA 値),4.人格（内向性，外向性),5.生活環境とに分ける。関係性の比較は上記の創造的能力の高いグループ，低いグループと創造的性格の１項から５項を検討する（図１参照)。

図１　研究の枠組み

創造的能力

1	能力が高いグループ
2	能力が低いグループ

評価項目は流暢性，柔軟性，独創性，具現化力である。

創造的人格

1	思考	記憶力，想像力
2	得意技	スポーツ，音楽，図工
3	学力	GPA 値
4	人格	内向性，外向性
5	生活環境	活動時間分析

（出典：筆者作成）

Ⅲ　研究の方法

1　被験者

私立大学（偏差値47）文系学科３年生31名

2　テスト方法とその評価

①アンケート調査（回答時間：15分）

以下詳細内容は末尾付録のアンケート調査票通りである。

・24時間の過ごし方

10分類で時間を記入する。10分類は下記４つの型の括弧内容＋就寝時間である。

条件１：アルバイトをしている人はその日

条件２：移動時間も含める（大学勉学時間なら通学時間を含める）

過ごし方の評価はアンケート記載10分類の内，就寝時間を除き下記４カテゴリーに分類し，その各時間合計を算出しその最も長く関わっている時間が30％以上を被験者の生活の中心として分類した。なお下記４カテゴリーの括弧内がその内容を示す。なおバランス型とは30％を超えるものがなく各内容がほぼ同じ時間である被験者である。

１）バランス型（大学勉学＋自宅学習,2),3),4）が均等な被験者）

２）人間関わり型（部活動，友人と過ごす，家庭団らんが30％以上の被験者）

３）ネット型（インターネット，ゲーム，テレビ鑑賞などが30％以上の被験者）

４）アルバイト型（アルバイトが30％以上の被験者）

・思考（記憶力，想像力）と得意技（スポーツ，音楽（楽器・声楽など），芸術（絵画・彫刻など））

リッカートタイプの３点スケール評価（５：好き,1：好きとは言えない,3：どちらとも言えない）で行った。なお５点スケール評価をした場合には迷うことが多く，好き嫌いを鮮明にするため３点評価してその差異を明確化した。ただし評価は5,3,1とする。

・学力

学力優秀者は被験者の２年生までの学力試験の成績（GPA）結果から秀（90点以上）・優（80点以上）に該当する優秀者７名とした。（本内容のみ後日筆者が調査した。）

・人格診断

ユングの性格タイプ診断（西野［９］(2003)）の設問を使いリッカートタイプの４点スケール評価（３：ぴったりしている,2：大体当たっている,1：どちらとも言えない,0：そんなことはない）で行い，集計は西野の指示方式にて集計する[5]。

②創造性テスト（実施時間は各10分で合計20分）

創造性評価は発想テスト（高橋誠［10］(1998)）と連想テスト（櫻井敬三［11］(2006)）を実施しその結果として流暢性，柔軟性，独創性，具現化力の４評価値を算出する。

―発想テスト：「ビール瓶」の本来の用途以外の使い道を10分間発想する。

―連想テスト：「うつす」から連想することを10分間連想する。

創造性テストの評価は下記基準で行った。

・流　暢　性：評価基準は発想テストの用途アイデア合計数とする。(重複回答は削除)

・柔　軟　性：アイデアの観点の区分で発想テストの用途アイデアを分けその観点数（高橋誠［10］(1998)）の観点区分に同じ）とする。

・独　創　性：今回の発想力テストで回答されたアイデア総合計数の１％以下の出現頻度件数を数える。

・具 現 化 力：全体の連想数に対する手段原理連想数比率とする。その方法は櫻井敬三［11］(2006）と同じ文節関係の係り受け解析を適用する。

3　実施者および実施日

実施者：筆者

実施日：2012年１月25日（水）

5　外向性と内向性は例えば質問が外向性に肯定的な場合で３ないし２の場合は○とし、１ないし０場合は×とし、○１つを１点として加算した。否定的な場合は×１つを１点として加算した。同様に内向性も得点化した。
西野［９］(2013）では外向性と内向性は満点20点の内11点以上はその傾向があるとしており、外向性と内向性を２区分した。16点以上が典型的なタイプとした。なお因子分析（非合理性、社会的内向性、論理の客観性、従順さ、のん気さ）は対象項目の満点の半分以上取った場合にはその因子が高いとした。

Ⅳ　結果

1　創造的能力結果のグルーピング

グルーピング結果を表２に示す。創造性テスト結果をもとにⅢ２項の②で示す評価基準に従い４カテゴリー（流暢性，柔軟性，独創性，具現化力）の各評価値の平均値を算出した。創造的能力が高いベスト10名のグループ（３カテゴリーのすべてが平均値以上の創造的能力が高い），創造的能力が中間のミドル９名のグループ（３カテゴリーの内いずれかが平均値以上），創造的能力が低いワースト12名のグループ（３カテゴリーのすべてが平均値以下の創造的能力が低い）で分類した。以下分析は能力が高いベスト10名のグループと能力が低いワースト12名のグループの比較を行う。

表２　４評価項目の平均値とグルーピング

評価項目	評価平均値	能力高い（ベスト10名）	能力中間（ミドル９名）	能力低い（ワースト12名）
流暢性	15.8	28.9	14.3	5.3
柔軟性	6.8	10.3	7.3	4.2
独創性	4.5	10.2	3.0	0.8
具現化力	3.8	5.8	4.3	0.9

（出典：筆者作成）

2　思考・得意技・学力の比較

表３に示す通り，能力が高いベスト10名のグループでは，想像力が高く，図工（絵画・彫刻など）が得意なことがわかった。また本グループには学力優秀者７名の内６名が入っていた。

表３　思考・得意技・学力の比較

人格内容（１）		能力高い（ベスト10名）	能力中間（ミドル９名）	能力低い（ワースト12名）
思　考	記憶力	3.1	3.1	3.0
	想像力	3.6　＊	2.2	2.3　＊
得意技	スポーツ	2.9	3.6	2.6
	音楽	3.3	3.3	3.1
	図工	3.2　＊	2.4	2.4　＊
学力優秀者		6名	1名	0名

（注）　有意確率基準：＊部は10％水準で有意である。　　（出典：筆者作成）

3　ユングの性格診断による人格の比較

表４に示す通り外向性と内向性については能力が高いベスト10名のグループと能力が低いワースト12名のグループには，明確な差異はないことがわかった。なお，注５で満点20点に対し16点以上は典型的タイプとされている。この16点以上でチェックすると，能力が高いベスト10名のグループの内向性４名の内４名，また能力が中間のミドル９名のグループの内向性５名の内３名が典型的内向性タイプに区分された。また能力が低いワースト12名のグループの外向性８名の内５名が典型的な外向性タイプに区分された。今回，被験者数が少ないため確定的なものではないが，傾向として創造的能力が高いグループは典型的内向性タイプが多い傾向にある。

表４　人格に関する外向性と内向性の比較

人格内容（２）	全　体	能力高い（ベスト10名）	能力中間（ミドル９名）	能力低い（ワースト12名）
外向性（典型的タイプ）	18名（58%）（内6名）	6名（60%）（内0名）	4名（44%）（内1名）	8名（67%）（内5名）
内向性（典型的タイプ）	13名（42%）（内7名）	4名（40%）（内4名）	5名（56%）（内3名）	4名（33%）（内0名）
小　計	31名（100%）	10名（100%）	9名（100%）	12名（100%）

（出典：筆者作成）

さらに，アンケート調査結果を使い因子分析を行った。その結果は表５である。結果より能力が高いベスト10名のグループは非合理性やのん気さが際立ち，一方能力が低いワースト12名のグループは社会的内向性，従順さが際立つことがわかった。

表５　人格に関する因子分析

	能力高い（ベスト10名）					能力低い（ワースト12名）				
因子項目	非合理	社会的内向	論理客観性	従順さ	のん気さ	非合理	社会的内向	論理客観性	従順さ	のん気さ
外向性	2	0	0	1	3	0	2	2	3	1
内向性	1	2	0	0	1	0	2	0	1	1
小計	3 30%	2 20%	0 0%	1 10%	4 40%	0 0%	4 33%	2 17%	4 33%	2 17%

（出典：筆者作成）

4　生活環境の比較

表６に示す通り,10区分の生活環境の時間測定結果から４カテゴリー，具体的には人間関わり型（家庭・友人・部活動などで過ごす），ネット型（インターネット，テレビ，ゲームで過ごす），アルバイト型，バランス型（上記３要素に偏りがない）に分け分析したが，能力が高いベスト10名のグループと能力が低いワースト12名のグループには顕著な差異は認められなかった。

表６　生活環境に関する比較

４タイプ	全　体	能力高い（ベスト10名）	能力中間（ミドル９名）	能力低い（ワースト12名）
バランス型	15名（48%）	6名（60%）	1名（11%）	8名（67%）
人間関わり型	6名（19%）	1名（10%）	2名（22%）	3名（25%）
ネット型	6名（19%）	1名（10%）	4名（44%）	1名（ 8%）
アルバイト型	4名（13%）	2名（20%）	2名（22%）	0名（ 0%）
小　計	31名(100%)	10名(100%)	9名(100%)	12名(100%)

（出典：筆者作成）

5　将来なりたい職務希望の比較

能力が高いベスト10名のグループは企画職希望が多く，能力が低いワースト12名のグループは各職務に散らばっていることがわかった。

表７　将来なりたい職務希望に関する比較

将来の職務希望		全　体	能力高い（ベスト10名）	能力中間（ミドル９名）	能力低い（ワースト12名）
未定		7 （23%）	1 （10%）	4 （44%）	2 （17%）
会社	企画職	9 （29%）	6 （60%）	1 （11%）	2 （17%）
	営業職	7 （23%）	1 （10%）	2 （22%）	4 （33%）
	経理・人事職	3 （10%）	1 （10%）	0 （ 0%）	2 （17%）
公務員		3 （10%）	0 （ 0%）	1 （11%）	2 （17%）
自　営		2 （ 6%）	1 （10%）	1 （11%）	0 （ 0%）
小　　計		31（100%）	10（100%）	9（100%）	12（100%）

（出典：筆者作成）

Ⅴ　結論と考察

1　結論

本研究では下記が判明した。

①創造的能力が高いベスト10名のグループ（流暢性，柔軟性，独創性，具現化力がすべて平均値以上）は想像力が高く，図工（絵画・彫刻など）が得意なことがわかった。

②創造的能力が高いベスト10名のグループには学力優秀者のほとんどが入っていた（７人中６名）。

③能力が高いベスト10名のグループと能力が低いワースト12名のグループの比較でユングの性格診断の外向性と内向性の区分での差異はなかったが，能力が高いベスト10名のグループには典型的内向性が高い者が多く存在した。

④能力が高いベスト10名のグループは非合理性やのん気さが際立ち，一方能力が低いワースト12名のグループは社会的内向性，従順さが際立つことがわかった。

⑤能力が高いベスト10名のグループと能力が低いワースト12名のグループの比較で生活習慣についてのグループ別差異は認められなかった。

⑥将来なりたい職務は，能力が高いベスト10名のグループは企画職が多いのに対し能力が低いワースト12名のグループは各職務にわかれた。

2　考察

以下箇条書きで個別に考察を加える。

①「想像力が高い」や「図工が得意」には共通点がある。それは前者が物事のイメージを心に浮かべる能力，後者が絵を描く時，デッサンをしてイメージを素描（粗々で輪郭や明暗描く）する能力である。すなわち頭の中の情報を引出し整理しながら形にしていく行為であり，創造活動のスタート時に重要な活動の一つである。

②創造的能力が高いベスト10名のグループに学力の優秀者が集中している。今回の創造性テストは言語系発想テスト（用途発想テスト）であった。モノと言葉の関係を知らなければ新たな用途など探しようがない。したがって日本語の認知能力や読解能力が前提条件とし必要であり，学力優秀者は本創造性テストの発想テスト評価値が平均値以上となるのは必然である。

③上記①と②の関連として，適切な非言語系創造性テスト（平面図形や空間図形の発想力テスト）が開発できれば，①の言語系発想テストではなく非言語系発想テストでその結果を確認でき，より質の高い創造的能力評価が可能になる。

④創造的能力が高いベスト10名のグループには典型的な内向性を持つ者が多い。この

典型的タイプはダーク［12］（2012）によれば集中力があり人見知りする性格の持ち主である。一方，創造的能力が低いワースト12名のグループには逆に典型的な外向性を持った者が多い。この相違は今回の研究では被験者が少なく断定できないが，今後，被験者を増やしかつ西野［９］（2003）の文章方式の診断とSD法による画像からの診断（西野ら［13］（2009））を合わせて実施することにより内向性と外向性の評価をさらに明確に把握できると考える。

⑤創造的能力が高いベスト10名のグループは因子分析から非合理性やのん気さが際立った。その行動は「理屈っぽく考えない直感型人間」が多いことが想定される。一方，創造的能力が低いワースト12名のグループはそれとは真反対に社会的内向性（社会のしがらみに遠慮する）や従順さ（組織のルールなどに従う）など「新しい独創的考えを貫くより周りの意見に従うこと」を優先する傾向が見られる。本件については櫻井［14］（2006）や石川［15］（2002）などでも同様な見解が示されている。

⑥被験者（大学３年生）の生活環境との比較では顕著な差異は認められなかった。人間の人格形成段階は幼少期とされており，すでにその時期は過ぎており，大学時代の生活環境の差異は創造性の高低差にはほとんど関係性がないものと推測される（内閣府［16］（2008））。

⑦将来なりたい職務希望の比較では，創造的能力が高いベスト10名のグループが企業の企画職を希望している。創造的能力が高いベスト10名のグループは自らが，創造性（含む想像性）が高いことを自覚し，その結果として企業で最も創造性を必要とする企画職を希望したものと思われる。一方創造的能力が低いワースト12名のグループは職種がわかれている。これは自身の創造性に関して明確な自覚（高いか低いか）がないことから，いまだ明確な職務を決めていないものと推測される。創造的能力が中間のミドル９名のグループも未定が多く同様と解釈できる。ただし，一般的に本件は学力成績とのリンクが鮮明であり，創造力を生かす観点での職務選択ではない可能性も否定できない。

⑧はじめにで記述した通り，「創造的能力が高く」と「創造的人格が備わっている」ことが今後の価値創造活動の中心的役割を担う人材である。そのためには創造的能力を把握するための創造性テスト（発想テスト，連想テスト）を実施し，その評価値が高く，かつ創造的人格を把握するためにアンケート調査を実施し，想像力や図工の能力が高く，ユングの性格診断の内向性タイプで非合理性やのん気さが際立つ適格な人物を人選することが大切だと思われる。

Ⅵ　おわりに

創造性を高めるための方策やその診断アプローチの方法は1950年代から盛んに研究され

てきた。「創造力とは何か」に始まりギルフォード［２］（1959）で示された創造的思考の知的モデルやその評価因子の見極めにより，今日多くの新たな知見に基づく検討がなされている。但し，表１に示す通り，創造的人物（含む独創的人物）が持っている創造的人格に関する論議が個別の研究の枠組みによりその結果が異なるものであった。いかに工夫しても，本分野研究は統一した結論が得られるとは思わない（皆川［17］（2006））。その理由は人間が千差万別の経験・知識・環境で生活しており画一化できないためである。したがってその状況を解明する方程式は難解である。しかし，その大枠での捉えどころ（急所）を探す努力は有用と考える。その貢献の一助として本研究を位置付けたい。

【参考文献】

［１］高橋誠編著『創造力事典』日科技連，pp.22－45,2002年

［２］Guilford J.P. ,“Creativity and its Cultivation Chapter10：Traits of Creativity”,Harper & Brothers Publishers, pp.142－161,1959

［３］穐山貞登『創造の心理』誠信書房，pp.101－108,pp.171－173,1962年

［４］Burkhart R., “The relation of intelligence to art creativity”, Journal of Aesth & Crit , Vol.17,pp.230－241,1958

［５］Shapero A., “Managing Professional People : Understanding Creative Performance ”, The Free Press A Division of Macmillan Inc,1985

［６］恩田彰（創造性心理研究会編）『S-A 創造性検査手引』東京心理,1969年

［７］クレッチマー西丸四方・高橋義夫訳『医学的心理』みすず書房,1985年

［８］関忠文他『NEW 心理学アスペクト』p.80,1997年

［９］西野泰広『こころの科学』東洋経済新報社,2003年

［10］高橋誠『ブレーンストーミングの研究①「発想ルール」の有効性』日本創造学会論文誌，Vol.2pp.94－122,1998年

［11］櫻井敬三『有用な特許出願のできる技術者の創造性評価に関する研究』日本創造学会論文誌，Vol.10pp.135－159,2006年

［12］ダーク・エンジェル著　ユンクの性格分析解説
http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Lynx/1401/bunseki.htm（検索2012年８月16日）

［13］西野・大野・岩田『ユングの８タイプの幼児画に対する学生にイメージ』国士舘大学教育学論叢，Vol.27pp.61－86,2009年

［14］櫻井敬三『有用な特許出願のできる技術者の創造性評価に関する研究』日本創造学会論文誌，Vol.10,pp.135－159,2006年

［15］石川純『研究業績とコミュニケーション・パターン　研究開発人材マネジメント』慶応義塾大学出版会，pp.99－115,2002年

［16］内閣府青少年育成施策大綱（2008年12月）

http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/taikou_201212/.../mokuji.html（検索　2012年８月24日）

［17］皆川直凡著『認知心理学の人格教育への応用可能性についての一考察』鳴門教育大学研究紀要，Vol.21,pp.13－26,2006年

付録　アンケート調査票

（男・女）年齢（　　）歳　　氏　名　（　　）

１．学校がある平日の過ごし方をお教えください。（アルバイトをしている人はその日を記載ください。）日によって大幅に違う場合にはたとえば2.5～3.5時間と（　　）内に記載ください。なお大学やアルバイト先への通学・通勤時間も加算ください。また，時間は0.5時間単位まで記載ください。

（記載後，合計時間は24時間か確認してください。）

（１）大学での勉学時間　（含む通学時間）　（　　）時間
（２）インターネットやテレビや携帯電話で過ごす　（　　）時間
（３）娯楽ゲーム等で過ごす（友人とのゲームも含む）　（　　）時間
（４）学校関係の勉強（予習・復習・宿題など）をする　（　　）時間
（５）家族との団らんで過ごす（含む朝食・夕食）　（　　）時間
（６）友達と過ごす（雑談等，ゲームは（３）項へ）　（　　）時間
（７）アルバイトをする（含む通勤時間）　（　　）時間
（８）部活動（その他趣味など）　（　　）時間
（９）就寝時間　（　　）時間
（10）その他（　　）　（　　）時間
合計時間　24.0　時間

２．次の28項目についてぴったりしている場合は３を，大体当たっている場合は２を，どちらとも言えない場合は１を，そんなことはない場合は０を（　　）内に該当する数字を記入ください。

（１）（　　）素直に既成の事実を受け入れて判断基準とする。
（２）（　　）身近なできごとに関心や注意が向き，常識や周りの意見に従う。
（３）（　　）自分の考えより周りのものに価値を見出そうとする。
（４）（　　）反応が速く，現実的で新しいことにすぐ馴れてしまう。
（５）（　　）寂しがり屋で協調性が高く，すぐに多くの友達ができる。
（６）（　　）俗にいう内弁慶で，気の合った少数の仲間としか付き合わない。

（7）（　　）客観的な事実よりも，自分がどう考えるかといった主観に重きを置く。
（8）（　　）おとなしそうに見えても強情っ張りで，頑として自分の意見を守り抜く。
（9）（　　）積極的に周りと関わるより，自分について深く考える。
(10)（　　）臆病で用心深く，人や新しいことの取っつきにくい。
(11)（　　）決断する際，感情より論理を優先する。
(12)（　　）考えは現実的で客観的である。
(13)（　　）新しい独創的な考えより，周りの考えを受け入れる。
(14)（　　）自分のことについて理屈っぽく考える。
(15)（　　）自分の考えを大切にするあまり，事実を歪めたら無視することもあり，頑固で強情な面がある。
(16)（　　）決断する時論理的に正しいかどうかより，自分の気持ちに合っているかどうかを優先する。
(17)（　　）理屈っぽく考えないで，好きか嫌いかで判断することが多い。
(18)（　　）周囲の要求や期待の沿うように心がけ，ためらいなく自分の気持ちを表現できる。
(19)（　　）外見と内心は大違い，一見穏やかそうに見えても，内面は情熱を満々とたたえ，世界中の不幸を一身に背負っているかのようである。
(20)（　　）人に悟られないよう，さりげなく気配りするタイプである。
(21)（　　）何事も経験することが大切と考えているが，合理性より非合理性を一般法則より偶然性を重視する。
(22)（　　）外界からの刺激をそのまま受け入れ，難しいことは考えずに，気楽にその場その場の現実を楽しむ。
(23)（　　）買い物をする時，よく見たり触ったりしないと決められないし，自分のイメージに合わないものは見向きもしない。
(24)（　　)感受性が強く，自分自身を理屈より感情で捉え，時には自分の世界に浸る。
(25)（　　）周りのできごとより，心の中から湧き上がる強い印象に心を奪われる。
(26)（　　)決断する時，なんとなく全体の感じをつかんで，ぱっぱっと決めてしまう。
(27)（　　）俗にいうひらめきタイプで，創意工夫に富み，アイデアは次々に涌くが，飽きっぽく現実的ではない。
(28)（　　）結果や現実より，可能性を重視する未来志向型である。
(29)（　　）周りのことに無頓着で，イメージが浮かんでは消え浮かんでは消え，イメージの世界を歩き周ることが好きである。
(30)（　　）順を追ってじっくり考えることが苦手で，どことなく神秘的で予言的な空想家や芸術家タイプで，容易に人から理解させずに，社会的適応が難しい。

3．貴殿の学業等での好き嫌いをお聞きします。各々あてはまる方を✓してください。

（1）□文系科目（国語，社会）が好き，　□理系科目（理科，数学）が好き，　□どちらとも言えない

（2）□スポーツをすることが好き，　□好きとは言えない，　□どちらとも言えない

（3）□音楽（楽器，声楽など）をすることが好き，　□好きとは言えない，　□どちらとも言えない

（4）□芸術（絵画，彫刻など）をすることが好き，　□好きとは言えない，　□どちらとも言えない

（5）□スポーツを見ることが好き，　□好きとは言えない，　□どちらとも言えない

（6）□音楽（楽器，声楽など）を聴くことが好き，　□好きとは言えない，　□どちらとも言えない

（7）□芸術（絵画，彫刻など）を見ることが好き，　□好きとは言えない，　□どちらとも言えない

4．貴殿は記憶力があると思いますか。いずれかに✓をしてください。

□そう思う，□そう思わない，□どちらとも言えない

5．貴殿は想像性があると思いますか。いずれかに✓をしてください。

□そう思う，□そう思わない，□どちらとも言えない

6．将来，職に就いた時どのような職種が希望ですか。いずれかに✓をしてください。

□企画職，□営業職，□経理・人事職，□公務員（　　），□自営（　　），その他（　　）

ご協力ありがとうございました。

NIHON KEIZAIDAIGAKU

DAIGAKUIN KIYOU

The Bulletin of the Graduate School of Business
JAPAN UNIVERSITY OF ECONOMICS

Vol. 1 No. 1 March 2013

Articles

A Study on the Current Condition and Outlook of Pharmaceutical Economics in Japan
……AKASE TOMOHIDE· OKAMOTO YOSHIHISA· KOINUMA MASAYOSHI(1)
Performance Management for Ensuring Organizational Competency through the Feedback of Personnel Evaluation ……FURUKAWA HISATAKA(17)
The Timing for Open Innovation: A Case Study of the Mobile Internet Diffusion Process
……ISHIMATSU HIROKAZU(37)
A Case Study Based on the Theory of Managerial Safety Analysis ……ISHIUCHI KOJI(51)
Reconsider about Population Dividends
—Attach Importance of Human Capital from Demography ……KANO YOSHIKAZU(71)
The Dilemma of Resource Accumulation in a Multinational Company
……NAKAGAWA MITSURU(81)
Research on the Risk Management about the Dwelling which Becomes Upper Layers and Gather
……NAKAMA TAEKO(97)
A Relation between a Favorite Subject , Personality Characteristic and a Result of Creativity Test
……SAKURAI KEIZO(111)
Analysis of The Labor Share and Profitability in National Hospitals ……SEKIGUCHI KIYOSHI(127)
The Ground of an Argument of Competitive Intelligence ……SUGASAWA YOSHIO(139)
Research on New Business Model for Smart Infrastructure
……SUZUKI HIROSHI·SHIROMURA MARIKO(161)
Consideration on Global Strategies of Manufacturing Industry
—Foreign Direct Investment and International Alliance Strategy of Tire Manufacturers—
……USHIYAMA YUKIO(177)
A Study of The Competitive Strategies at The Japanese Schools for Foreign Students
……YASUGI SATOSHI(197)
Study on Management Strategy of the Venture Business
—Why Are Some Reagent Ventures Active States under the Recession？—
……AMANO MASAKI(205)
Current Situation and the Potential for Tourism Development in Myanmar ……Myat KALAYAR(215)
Research on Introduction of Information Technology for Small and Medium−Sized Enterprise Cooperatives
……SOMA ITTEN(235)
Study on Consumer Protection in the Financial Sector
—Mainly on the Comparison of the Dispute Resolution Organization of the Financial ADR System in the UK, Japan and China— ……JIN JING(255)

Published by JAPAN UNIVERSITY OF ECONOMICS
TOKYO SHIBUYA、JAPAN